

隠岐島近海における春季の小型イカ釣漁船のスルメイカ漁況と群の性状

川 口 哲 夫 (鳥取県水産試験場)

要 旨

近年、夏生れ群の資源が増加し、5～10トン型の1人乗り小型イカ釣漁船による沿岸スルメイカ漁業が盛んとなり3～5月の春漁期における漁獲量が、小型イカ釣漁船の経営にきわめて重要となっている。

この報告は隠岐島近海において小型船により漁獲されて境港に直接水揚され、また、隠岐島各漁協より境港に搬入されたスルメイカの漁獲量について調査し、そのなかより3～5月を中心とした春漁期のスルメイカ漁獲変動と、生物特性について検討した。

1. 隠岐島及び境港より出漁する小型イカ釣漁船は総数約300隻である。漁場は島根県日御碕沖～隠岐島周辺～鳥取県青谷沖までの水深200m等深線より陸岸の沿岸域が主漁場となっているが、時期的には北緯37度附近の沖合域まで出漁することもある。

この海域における漁期は、3～5月の春漁期、6～8月の夏漁期、9～11月の秋漁期、12～2月の冬漁期に大別されるが、ここでは各漁期のなかで夏生れ群の漁獲量が最も多い春漁期について検討した。

2. 隠岐島近海における春漁期の小型イカ釣漁船によるスルメイカ漁況は、3月上旬～中旬にかけて漁獲量がしだいに増加し、3月下旬～5月上旬にかけて春漁期の最盛期となるが、5月中旬～下旬には漁獲量は減少する。

3～5月の春漁期における漁獲量の経年変化は、1978年 1,092トン(715万尾)、1979年 894トン(561万尾)、1980年 1,417トン(1,017万尾)、1981年 2,409トン(1,793万尾)、1982年 2,023トン(1,353万尾)であり、過去5年間の漁獲量では、1981年が最も多く、1979年が最低であった。

3. この海域で春漁期に漁獲されるスルメイカの魚体の大きさについて、1980年と1981年の調査結果よりみると、3月では雌・雄ともにモードは18～19cm台にあり小型群が主体となっている。4月には上旬が雄ではモード18～19cm、雌がモード19cmと小型であるが、中旬では雄19cm、雌20～21cmにモードがあり、雌では中型群が主体となっていた。

5月上旬では雄が18cm、雌が17cmと19cm台にそれぞれモードがみられ小型群が主体であるが、5月中旬～下旬には雄が19～20cm、雌が21～22cmと中型群主体の魚群

構成であった。

6月上旬では雌・雄ともに18cmと20cm台にモードがあり小型群と中型群であるが、下旬では雌・雄ともに20cm台にモードが認められ、また、雄では21~22cm、雌では23cmに副モードがあって中型群主体の魚群によって構成されていた。

4. 銘柄別漁獲調査により統計的に推測した外套背長組成は、2月上旬がモード21cm、平均値21.5cmであり、旬がすすむにしたがって群のモード及び平均値が小さくなり、3月中・下旬ではモード18cm、平均値18.6cmと最も小型となるが、4月上旬よりは魚体が成長しモード及び平均値は増加しはじめ、4月下旬より5月下旬にかけては外套背長20cm台以上の割合が多くなる。6月ではモード20~21cmにあるが、中型および大型群を主とした魚群構成となっており、実測した外套背長組成とはほぼ一致している。
5. 春季に隠岐島近海に来遊するスルメイカの性成熟について検討し、生殖線の成熟状態と外套背長の関係よりスルメイカの群の区分について試してみた。

3月では小型で未熟な夏生れ群(S_1 群)、中型で未熟な冬生れ群(W_1 群)、中型で半熟(W_2 群)~成熟(W_3 群)の冬生れ群が出現するが、量的には小型で未熟な夏生れ群(S_1 群)が大部分である。4月には小型で未熟な秋生れ群(O_1 群)、小型及び中型で未熟な夏生れ群(S_1 群)、中型で半熟及び成熟(S_2, S_3 群)の夏生れ群が出現する。

5月では小型で未熟な秋生れ群(O_1 群)、中型で半熟~成熟(S_2, S_3 群)夏生れ群が出現し、4月と同様に中型で未熟~成熟を含む夏生れ群が漁獲の主群となっている。6月は小型で未熟な冬生れ群(W_1 群)、中型で未熟な秋生れ群(O_1 群)、中型で半熟又は成熟の夏生れ群(S_2, S_3 群)が出現するが、数量的には小型の冬生れ群(W_1 群)中型の夏生れ群(S_2, S_3 群)、中型の秋生れ群(O_1 群)の漁獲割合が均等化し三系群が混獲され、漁獲量も魚群の北上にともなって減少する。